

## 「JENESYS2019」中国青年メディア関係者代表団第1陣 参加者の感想（抜粋）

### 第1分団（訪問地：神奈川県、東京都、秋田県）

○1. 入念に耕作する農業。視察した横浜梨果樹園では、梨棚式の栽培法を採用しており、農家に

としては、梨樹の一本一本全てが自分の子供のようなものである。丹精込めて育てられ、果樹園全体

がまるで園芸芸術品のようで、芸術鑑賞できるほどだ。

2. 農業の生産加工の自動化が進んでいる。農業の視察において驚いたのは、日本の農業の自動化のレベルが高いことだ。AI、ドローン、オートメーション化された農機具や機械を使用し、人的コストや時間が大幅に削減され、効率が極めて高い。

3. 農業従事者の年齢が全国的に高い。視察した秋田県仙北市のある農家は、一家3人だが、息子は就農していない。家長の2人の年齢はいずれも70歳を超えている。これは、日本の高齢化と非常に密接な関係がある。農業の労働力不足が深刻化しているため、我々が視察したように、農業生産においてドローンやオートメーション化の機械設備を大量投入し、農業の効率化を高めているのである。

4. 田園の総合体。住宅、田畑、宿泊、農業生産がすべて、農家の自宅周辺にある。そのため、農家ツーリズムとして、より多くの外国人観光客を受け入れ、体験旅行や観光旅行を発展させることができ、農家の収入増加につながる。

○私は今回、秋田県仙北市の“西の家”という農家にホームステイすることになった。70歳を超える年齢のおじいさんとおばあさんが、自ら運転する車で我々一行6人をその住まいまで連れて行ってくれた。230年の歴史のある茅葺き屋根の民家が目に映ったとたん、私は日本の伝統文化の魅力と、そして“大唐”に代表される中国の文化の精神とその伝承を強く心に感じた。

純木造建築で、屋根は古木に稲わらが葺かれ、雨や雪も防ぎ、冬は暖かく夏は涼しい。ホストファミリーの奥さんは2~3カ月に一度、1000ドルも投じて維持修復を行っている。貴重な歴史の記憶と伝統文化を堅持しようという彼女の気持ちが伝わってくる。現在、中国の歴史文化的建造物は、都市化の波に押されて、一部はまさに消滅しつつある。文化を重視し歴史を大切にす日本人の精神は、中国の政府官僚たちが学ぶべきものである。

農家での農作業体験の一環として、我々6人は“西の家”の大型ハウスでの野菜耕作作業に参加した。これは私自身も初めて体験する“大型ハウス”の技術を使用したジャガイモ栽培である。そのプロセスは、畔作りから灌水、培土も、また、クロス金具でハウスのパイプを固定する方法にしても、日本の農家は方法を詳細に把握しており、日本の精緻な農業の成功の理由、偉大たる所以を目の当たりにした。俗に、“細部が勝敗を決定する”というが、まさに“西の家”のような日本中の千万の個人経営農家が、限られた土地を最大限に集約利用し、日本の農業の高付加価値発展の奇跡を作り上げてきたのだ。

○7月23日、我々は共同通信社を訪問した。7月25日には、秋田魁新報社を訪問した。同ランクのメディア従事者として、秋田魁新報社の現状と、ニューメディアの台頭における従来メディアの生存の道について、より親しみを持った。秋田魁新報社の収益の60%は自社新聞の発行による収入で、40%は広告によるものだと知り、新聞の電子版の閲読にも、ユーザーは料金を支払うことを知った。こうした状況は中国では実現不可能だ。中国ではニューメディアの台頭により、読者の閲読方法が変わり、新聞の閲読量と読者の購読数が大幅に減少している。視察において、我々は日本のメディアも現在、同じような問題に直面していることを知った。しかし日本のメディアは、一貫して“内容が最重要”という理念を貫いている。さらに、円滑な配送ネットワークに支えられて、権威ある真に信頼性のある記事が定期購読者の手許に届けられ、極めて高い信頼を勝ち取っている。これは新聞社の新聞発行にとって重要な役割を果たすものである。私が最も感動したのは、日本のメディアの評価制度である。メディアが情報を発信する際、いくつかの誤謬が生じることもどうしても免れない。中国では通常、ミスはその当事者に責任が求められるが、日本のメディアでは、まず新聞社の組織構造に問題を見出しに行く。こうすることで人心を掴むとともに、新聞社にもより多くのプラスの効果が生じる。

だが、日本のメディア(従来型のメディア)は、ニューメディアの運用面では、中国よりややスローテンポだということも分かった。近年の通信技術の飛躍的な発展に伴って、中国のニューメディアには大きな変化が生じている。我々記者もよりマルチなメディアの運用技術を学習し、できる限り全く新しいメディアの形態を活用して、中国の状況を伝え、PRしていく。

帰国後は、日常の業務の中で日本での見聞や感想を積極的に周囲に伝えていく。今回の視察では、大量の写真を撮影した。写真の内容はありとあらゆる範囲にわたり、日本の食文化から伝統建築と現代建築、伝統文化、伝統的風習、民俗芸能まで、これらの写真の背後には、それぞれの物語が記憶されている。帰国後は、これらの写真や物語を同僚や友人、家族に伝え、この中から学ぶべき点や経験を選抜して、大衆に広めていきたい。

将来、私の地元でもゴミの分別が始まる。今回の訪日では、ゴミの分別における重要な部分を学んだ。日本に来て最初に、ゴミの分別の重要性を学び、日本人は分別したゴミの埋め立ての上に現代都市を築いていることを知った。同時に、分別によって得たゴミからはより多くの資源を作り出せることも知った。滞在中、日本におけるゴミ分別の実際の方法を目にし、それぞれのゴミの分別にも次第に慣れていった。一人一人の簡単な行動が、日本の都市と農村をとっても美しく、清潔にしている。ホームステイでは、ホストファミリー宅の小さな女の子から教わった。私が彼女に処理の仕方を尋ねると、彼女はゴミになったボトルを捨てずに、きちんと水洗いをしてから分別をした。これには本当に驚いた。この時私は、幼い頃からの教育がいかに重要であることを、改めて理解した。一人の新聞記者として、より多角的な方法で、我々の読者に向けてこうした優れた理念を伝えていく。

○1. 今回の訪日で最もダイレクトに感じたのは、中国の都市インフラはハード面ではすでに日本に追いついているが、ソフト面(細かなサービスや都市計画サービスなど)で

はまだ努力が必要だ、ということである。

2. 民族的であり、国際的である。今回訪問した横浜市と秋田県とを比較すると、個人的には、秋田県の訪問体験のほうがより楽しかった。横浜市は最も早く対外開放された港町として、多くの西洋文化を吸収しており、日本の土着の要素や風情はやや薄い。だが、秋田県の竿灯や太鼓演奏、和服体験は、我々のもつ日本の印象により近いものだった。日本の伝統文化、大和民族の風俗習慣は、まさに一見の価値がある。

3. 日本の農業は、ある意味で、中国の“現在”と“未来”を代表(あるいは反映)している。日本の農村が今まさに直面している空洞化や高齢化の加速といった問題は、中国の“現在”と似ている。しかし日本は何といても先進国であり、技術水準も高く、農業の発展においては“6次産業化”といった新たな方向性が始まっている。これは中国の農業への啓示であり、中国の農業が“未来”どのように進むのか、日本からより良い経験を吸収することができる。

4. 日本のゴミ分別はすでに相当なレベルに達しており、しかも日本のゴミ処理場は街なかにある。この状況は、より多くの中国代表団を招いて詳細に視察されることが望ましい。

## 第2分団（訪問地：東京都、長野県）

○ 訪日を通して、メディアとスポーツの両面からの感想を述べる。まずメディアの面から。日本経済新聞社と信越放送の訪問、見学、観察を通じて、二つのことを体得した。一つは日本のメディア従事者の謹厳な業務への姿勢である。番組制作時、カメラマンもディレクターも全く気を抜くことなく、一部の重要ニュースでは、例えば地震の場合、規模の大きさに従って異なる表現のアナウンスをする点などは、我々も学ぶべきである。二つ目は、金融分野メディアの構築において、日本のメディア組織は実績が非常に多い。日本経済新聞社はマスコミ帝国を作り上げた後、金融メディアへと方向転換して事業開拓し、複数のテレビ局の株主となり、ニューメディアの運用サイトも作り上げている。信越放送は“ラジオ・テレビ局”として、完備され高効率のラジオ・テレビ連携システムを作り上げている。一つの拠点に複数のプラットフォームを持つという刷新的モデルは、我々も学ぶべきである。

次に、スポーツの面から。東京オリンピック・パラリンピックまで残り1年となった現在、日本の会場建設は計画通りに順調に進んでいると同時に、環境問題も重視している。近年中に冬季オリンピック・パラリンピック開催を迎える中国と、オリンピック開催理念において相通じる点も多く、参考に値する。会場の後利用に関しては、長野冬季オリンピック・パラリンピックのスピードスケート会場は試合の開催や子供向けのスケート場として貸し出すほか、コンサートも開催するなど、黒字運営を達成している。その利用率の高さはスケートの発展を推進している中国として、学ぶべきである。日本武道館では、子供たちが定期的に剣道や柔道、書道の大会に参加している。同時に、行政がコミュニティや学校に委託して全国に一万カ所以上の武道場を建設し、スポーツを草の根にまで浸透させ、文化として根付かせている。中国の一般市民のスポーツ普及や伝統文化教育に対しても、日本のモデルは研究に値する。

○日本武道館を訪問した際、日本社会が伝統文化を心底から守ろうとしていることを強く感じた。なかでも特に印象的だったのは、1. 日本武道館や学校の武道場などの利用率が非常に高く、しかも小中学生に対して公益性が重視されていること。2. 剣道であれ柔道、相撲であれ、これらスポーツ種目は競技の順位だけを争うものではなく、伝統文化の修養という目的が与えられ、“道”の精神が体現されている。伝統文化と社会の礼儀がより重視されている。3. 伝統文化の継承と維持のために、剣道や柔道などの種目を学校の必修科目に取り入れ、伝統文化の意識を子供の頃から養っている。4. 小学生の剣道と柔道の試合を見学していた時、試合の前にも後にも、お辞儀をして礼を尽くし、儀式感覚によって伝統文化の作法を身に着けていることに深く感動した。多くの面で、日本社会の伝統文化に対する愛情と伝承が強く反映されていた。インターネットが席卷する世情にあって、社会の各所で伝統文化を放棄せず逆に遡上させ、様々な形で伝統文化が国民の日常生活に溶け込んでいる。こうした方法は参考にし、学ぶべきである。

また一方で、日本人の規則意識、面倒と思わずに物事を行う精神に、とてつもなく感動した。例えば、信越放送を訪問した際、全職員がロビーで我々代表団を歓迎してくれた。出発の際にも、仕事を一時中断してまで、玄関前で手を振り見送りしてくれた。実際のところ、手を振って見送りすることは日本人の接客のマナーであり、国民性となっている。また、記者の質問に対して、その場で答えられないものには、あとからいろいろな方法でその回答を知らせてくれる。こうした、面倒を嫌わず、まじめに責任を果たす姿勢からは、その気遣いが倍増して感じられる。学ぶべきである。

○東京オリンピック・パラリンピックで計画されている“ホストタウン構想”とbeyond2020 プログラムでは、受け入れ都市という方法で各地方自治体と連携して、より多くの公共パワーを発動し一般市民を動かすことで、オリンピック・パラリンピックの事前準備へと誘っていく。特筆すべきは、この構想は日本国内の多くの都市も“オリンピック・パラリンピックの恩恵”に預かるという点だ。ホストタウンはオリンピック・パラリンピックを契機に全世界規模で広域マーケティングが行える。今回の訪日では、長野県を訪問した。長野県は中国河北省と友好都市を結び、すでに36年になる。両者は文化、経済、スポーツ、農業など多くの分野で交流協力を展開してきた。長野県では、現地の人々の“中国の友人”に対する情熱を感じた。長野県下の4市2町は中国のホストタウンである。長野市は一連の文化交流活動を入念に準備し、アスリートから青少年、学校、一般市民までが何がしかのプログラムに参加し、両国国民の認識を深めている。こうした活動は双方の友情を一層深めるとともに、我々にとっても、東京オリンピック・パラリンピックにより大きな期待を抱かせるものとなる。

○私は初めて美しい日本の国土に降り立った。実は来日前に、私は多少の予習をしていた。日本に関する多くの資料を調べていたのだが、7日間の見学訪問を通じて、百聞は一見に如かずという言葉が強く感じた。日中友好会館の親切で細やかな受け入れ、日本の行政、企業、メディア、一般市民とのフェイストゥフェイスでの交流は、私にとってどれも、より明確に、深く日本を知ることができ、収穫は非常に大きい。以下に、いく

つかの感想を述べる。

1：オリンピック精神の伝承と発揚。我々は現在建設中の新国立競技場と、ちょうど試合中だった日本武道館を見学した。また、内閣官房東京オリンピック・パラリンピック推進本部事務局から東京オリンピック・パラリンピックに関するブリーフを受け、長野県冬季オリンピック・パラリンピック会場を見学した。日本武道館では都内の少年少女の柔道大会が行われており、生徒たちの競技場内での様子はまじめで、且つかわいらしかった。日本が武道の発展のために行っている一連の事業から、伝統文化の保護と継承を重視していることが見て取れた。

2：伝統文化の堅持と継承。百年の老舗、百年の技法、百年の製品が、日本ではどこにでも見られる。神楽坂で自由取材を行った際、我々のグループは岡山県の備前焼を扱う老舗の店主、Oさんを取材した。彼は我々に日本の伝統である“清水焼”を紹介してくれた。それは120年の歴史のある品で、彼の心の中では単なる製品ではなく、伝統文化の縮図ともなっている。

3：礼儀を尊ぶリスペクト精神。ホームステイ体験の際、私たちの“おじいさん”Mさんとその奥さんは、私たちのためにすばらしく盛りだくさんな夕食を用意してくれ、たくさんのお菓子や、心のこもったお土産も下さった。Mさんの温かい笑顔は、まるで故郷に帰って自分のおじいさん・おばあさんに会ったかのような気持ちになり、全てが私の心を癒してくれた。

4：自然を尊ぶ。日本の山間部の温泉では独特な温泉文化が形成され、臨海部では日本料理の天然の魅力がある。ホストファミリーのMさん一家が我々と心を開いて交流してくれたこともまた、最も自然な行動である。自然に感謝し、命を尊び、畏敬の念を持つ。自然は生命の源であり、このことは私の心にとても強い共感を生んだ。